

ローマ字表記と音韻論

—天草版平家物語を資料として—

根 岸 亜 紀

1. はじめに

「天草版平家物語」は、室町時代末期にキリスト教布教のために日本に来た、ポルトガル人宣教師のための日本語学習テキストである。「天草版伊曾保物語 (Esopono fabvlas)」と「天草版金句集 (Qincuxü)」との三書合綴本の最初に位置するものである。古典「平家物語」をもとにした大略(日本語)が、ポルトガル語式ローマ字綴りで書かれている。日本語が、音素文字であるローマ字であらわされていることにより、それが編纂された室町時代当時の日本語の発音を忠実にあらわしているものとして、貴重な研究書とされている。

当時のイエズス会ポルトガル人宣教師たちは、布教先の国の言語を用いて宣教活動をしていた。日本においても例外ではなく、日本語を用いての宣教活動のため、「読むこと、書くこと」よりも、直接的に日本人に接するために必要な「話すこと、聞くこと」を主眼とした日本語習得に努めた。しかし、ポルトガル人宣教師たちは、日本で使われていた漢字・仮名については何の知識もないために、自国で使用されているローマ字を用いて日本語をあらわして研究したのである。「耳で聞いた日本語の音(発音)を、そのまま音素文字であるローマ字であらわし、そのローマ字であらわした日本語をそのまま発音する」方法で学習することで、かなり日本人に近い発音を可能にしたと思われる。日本語についてまったく知識を持っていない宣教師であっても、自国のローマ字で書かれたものを、自国の発音どおりにそのまま読みあげることによって、「日本語を話している」と思わせるほどであったのではないだろうか。

「天草版平家物語(以下、Feiqe)」は、日本語をポルトガル語式ローマ字綴りであらわしているわけであるが、それは当然のことながら、現行私たちが目にするローマ字綴りとは異なる部分がある。それは、当時のポルトガル語の発音・表記法を基本とするポルトガルで使われていたローマ字を、日本語にあてはめているからである。

本論では、耳で聞いた日本語の発音どおりにあらわしたローマ字表記と、室町時代当時の音韻を体系立ててあらわしたものを示していく。そして、それぞれの特徴をみていくことにする。ポルトガル語式ローマ字表記をみていくにあたり資

料とするものは、「Feiqe」を中心としたキリシタン文献資料とし、今回は対象範囲を「短音節」のみとする。なお、文中「 」内にあらわすローマ字表記は、実際にキリシタン文献資料中に出てくる表記である。用例は「Feiqe」本文中からとり、出現箇所を（ ）内に、巻数・ページ・行の順で記した。用例中の／は本文中の改行部を意味する。

2. ポルトガル語式ローマ字綴り

まず、ポルトガル語式綴りのローマ字の特徴を、ポルトガル語の発音・表記法という背景とてらしながらみていく。その際、日本語の「五十音図」にしたがって、それぞれの行ごとにみていくことにする。その際、特に「同音異字」の特徴に注目してみていく。

仮名・ローマ字綴り対照表（短音節・拗音短音節のみ）

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	a	li,j,y	V,v,u	ye	Vo,vo,uo
カ行	ca 〈カ〉 qua 〈クァ〉	qui (qi)	cu,qu	que (qe)	co
ガ行	ga 〈ガ〉 gua 〈グァ〉	gui	gu	gue	go
サ行	fa	xi	fu	xe	fo
ザ行	za	li,ji	zu	le,je	zo
タ行	ta	chi	tçu	te	to
ダ行	da	gi	zzu	de	do
ナ行	na	ni	nu	ne	no
ハ行	fa	fi	fu	fe	fo
バ行	ba	bi	bu	be	bo
パ行	pa	pi	pu	pe	po
マ行	ma	mi	mu	me	mo
ヤ行	ya		yu		yo
ラ行	ra	ri	ru	re	ro
ワ行	Va,va,ua				
撥音ン	n,m,~				
拗音	qia guia xa la,ja gia cha nha fia bia pia		xu lu,ju		qio,qeo guio xo lo,jo gio cho nho fio

ア行

ア行で特に注目したいのは、エとオである。ア、イ、ウは、それが単独で使われても、子音と結合して使われても、その形を変えないが、エ、オは、単独で使用される場合と子音とあわさった場合とでは、その形が異なる。エ、オが単独で使われる場合には、「ye」、「vo・uo」と子音を伴ってあらわされる。これは、それぞれが単独で出てくる場合、/y/、/w/を含んだ音をあらわしているためと思われる。

その他に特徴があるのが、イの表記である。イの音には、「i、j、y」三種類のローマ字が当てられている。イ音をあらわす場合、最も基本的なものは「i」である。「i」は、母音音節にも、それ以外の音節にも用いられるが、「j、y」は、母音音節に限られる。二重母音でイイとイ音が重なる場合などに、「j、y」が用いられる。「y」は、語中語尾には母音のあと、特に「i」のあとにおかれる傾向にある。この「j、y」が用いられている場合も、ところによって「i」の文字であらわしているところもあるため、「i、j、y」それぞれに音の違いはないと思われる。表記をするにあたっての、便宜上のものであると思われる。

また、ウは「v」と「u」とがある。どちらもウの音をあらわすが、「v」は主に語頭で、「u」は主に語中で使われる。「v」は語中でも出てくるが、その際は、複合語の後接語頭に位置しているため、やはり語頭に出てくる性質には変わらないものと思われる。これもまた、表記上の便宜的なものであって、文字によってその音に違いはないようである。

Azzumavotoco 東男 (巻4 p.349・12) Qijno Niy 紀伊二位 (巻4 p.397・120)
vuou 魚 (巻1 p.86・12) yeigua 栄華 (巻1 p.3・16) vouoqu 多く (巻1 p.84・111)

カ行

カ行は全体にわたって、現行のものとは大きく異なる。

まず、ポルトガル語では、kの字を欠く。そのために、カ行の音をポルトガル語式のローマ字で表すとすれば、「ca、qui、cu,qu、que、co」というようにcとqを用いてあらわすことになる。

クについては、「cu」と「qu」の二種類が使われているが、「qu」は特に活用語の活用語尾にク音が出てくる際にあらわれる。その他の一般的なク音の場合(名詞や、活用語中の活用語尾以外に出てくる場合)は、「cu」が使われている。このク音のcとqのあらわし分けに関しては、文法的な学習をするにあたって

の便宜上のあらわし分けであり、その音に特に差はないとみられる。

ポルトガル語において、「ca」、「co」は/ka/、/ko/の音をあらわす。しかし、ci、ceは/si/、/se/の音をあらわしてしまうために用いることができない。そこで、「qui」、「que」を用いたのである。また、「qui」が「qi」、「que」が「qe」とあらわされることがあるが、特に音の差はない。ただし、ポルトガル語において、qは常にuを伴い、他の母音には直接続かないという性質があるため、「qui」、「que」が一般的であり、「qi」、「qe」はその省略した形のようなものである。

いずれにしても、音はkを使用したものと変わりがないものと思われる。ちなみに、現在使用されているポルトガル語において、kは、外来語にしか使用しないようである。

なお当時は、“カ”だけではなく“クッ”の音も語中で使用されている。これは「ca」と区別をし「qua」のかたちであらわされている。

Cucocu 九国 (巻1 p.87・119) yuquye 行方 (巻1 p.84・16) na- / quaqu
泣く泣く (巻1 p.84・17-8)

ガ行

ガ、グ、ゴについては、特にことわる点はない。ここでみておきたいのは、ギとゲについてである。

ポルトガル語においてgは、i、eの前では/j/音 (/sh/の濁音) であることから、「gi」は「ji」に通ずる音、「ge」は「je」に通ずる音になってしまう。そのため、カ行の「キ・qui、ケ・que」にしたがって、「ギ・gui、ゲ・gue」としたものと思われる。

なお、カ行でみたように、“ガ”だけではなく“グッ”の音が語中で使用されている。これは「ga」と区別をして「gua」のかたちであらわされている。

Guiichi 妓一 (巻2 p.94・19) guenzan 見参 (巻3 p.182・119)

サ行

表中にはsが使われているが、サ、ス、ソには一般的にʃ (ロングエス) が使われる。このʃとsは、その音には違いがないと思われる。

サ行において特にみておかねばならないのは、シとセについてである。シとセの音に、「xi、xe」とsではなくxが使われている。ポルトガル語でxは/sh/の音をあらわす。つまり、「xi」は/shi/の音であることを、「xe」は/she/の音であることをあらわしていたことになる。しかし、ポルトガル語においてseは存在していた。それにも関わらず、あえて「xe」を用いたのは、当時のセの音がシェに近かったことを表記の面であらわしていたのではないかと思われる。

Xiguefira 重衡 (巻4 p.257・112) xechiye 節会 (巻1 p.8・19)

ザ行

ザ行では、ザ、ズ、ゾに z が、ジ、ゼに j がつかわれている。ポルトガル語では、j は /sh/ 音の濁点をあらわす。そのため、/sh/ をあらわす x を使用したサ行の「シ・xi」、「セ・xe」にしたがい、「xi→ji」、「xe→je」にしたと思われる。また、ze は存在するにも関わらず、「je」を使っているところから、ゼはジェに近かったことをあらわしていたのではないかと思われる。

jinxeqi 人跡 (巻1 p.80・11) suzuri 硯 (巻1 p.92・17) jefitomo ぜひとも (巻1 p.15・121)

タ行

タ行のタ、テ、トについては、特にことわる点はない。ここでみるのは、チとツである。

チは ti ではなく「chi」になっている。現在のポルトガル語では、「chi」は /shi/ つまり xi の音をあらわすが、昔の「chi」は /tshi/ をあらわした。ツに使われている çu は、ポルトガル語で /su/ の音をあらわす。つまり「tçu」で /tsu/ の音をあらわしていることになる。

chichigoje 父御前 (巻4 p.385・p10)

ダ行

ダ行では、ダ、デ、ドに d を、ヂに g を、ヅに zz を使用している。

ヂにあてている「gi」であるが、これはポルトガル語では、「ji」と同じ音(ジ)をあらわす。しかし、あえて異なるローマ字を用い「gi」とあらわしていることから、ここではジの音と区別をしているのだと思われる。当時まだ区別があった「四つ仮名」⁽¹⁾をローマ字表記でもあらわし分けているのである。ヂをジと区別し、音をあらわすローマ字表記においてもジ「ji」と区別をし「gi」を使用しているのである。同様に、ヅもズ「zu」と区別し、「zzu」を用いてあらわしている。ポルトガル語には「zzu」の綴りはなく、ヅの音をあらわすための造字である。「zu」に似てこれとは別な音という意味、で「zzu」としたものと思われる。

gixin 地震 (巻4 p.366・13) togicomotte とちこもって (巻1 p.83・13)

fazzucaxij はづかしい (巻1 p.52・118) mizzu 水 (巻3 p.162・110)

ナ行

ナ行については、特に問題とすることはない。

ハ行

ハ行は h を使用せずすべて f を使ってあらわされている。これは、当時の音が h [h] 音ではなく、f [Φ] 音だったことをそのまま表記においてあらわしているということになるだろう。ただし、ポルトガル語では、h の文字は使用して

も、その音は発声しないという決まりがある。そのため、室町時代当時一般的に使われていた日本語の実際のハ行はh音であっても、自国のローマ字表記法(hは発音をしない)の原則にしたがってfの文字を使用した、とも考えられる。
Fachimandono 八幡殿 (巻3 p.157・l7) Fauagojen 母御前 (巻4 p.357・l17)
Fiqi cazzuqu ひきかづく (巻2 p.130・l10) fugui 不義 (巻1 p.46・l20)
Feiqemonogatari 平家物語 (序 p.2・l17) Fotoqegoje 仏御前 (巻2 p.101・l10)

バ行については、特に問題とすることはない。

パ行

パ行については、特に問題とすることはない。

マ行

マ行については、特に問題とすることはない。

ヤ行

ヤ行のイ、エは特にあげられていない。エに関しては、ア行であがっている「ye」がくると思われるが、イに関しては、必ずしも「y」が対応するとはいえない。「y」はイ音の表記のひとつであり、ヤ行の子音としてのyという働きはないと思われる(yを用いるイは、ア行の箇所でもふれたように、イイと二重母音になる際に「i」に重ねて用いられる働きがある。特にヤ行のイとして考えられたものとはいえないと思われる)。

ラ行

ラ行については、特に問題とすることはない。

ワ行

ワ行は、ワに二種類の表記があるわけだが、「va」も「ua」も、v、uの綴りの違いによって、その音には変わりはないようである。ワが語頭にくれば「va」であり、語中・語尾にくれば「ua」になるという使い分けだけである。v・uに/w/の音が含まれているために、これで/wa/の音をあらわしていると思われる。

ここでは特に、キ、ウ、エ、ヲはあげられていない。ヲに関しては、ア行のオ(「vo、uo」)を同様に使用できると考えられる。つまり、ア行のオも、ワ行のヲも、同様の表記を使うことから、オとヲは文中ではひとめで見分けがつくわけではない。

vatacuxi 私 (巻1 p.5・l16) Yoxitçuneua 義経は (巻4 p.354・l24)

fayavma vomotte 早馬をもって (巻4 p.226・l8)

minicui monouo 醜いものを (巻4 p.307・l2)

撥音ン

撥音ンを表す表記は、「n、m、~」の三種類ある。「n」は、語中であっても語末であっても使用される。また、その前や後ろにどんな文字がきても使われる。「~」は、母音に付けられる符号である。ポルトガル語では、「~」がついたものは、鼻母音になるのであるが、キリシタン文献資料のなかでは、「~」であらわしたンも、他の箇所では「n」を使ってあらわしていることもあり、「~」と「n」にどうも音の違いはほとんどなかったものと思われる。もうひとつの撥音をあらわす表記である「m」は、b、m、pなどの直前など、あらわれるパターンがほぼ決まっている（すべてが規則的に用いられているわけではなく、例外がある）。そのため、「n」とは音を異にし、「m」そのものの音であったのではないか、と思われる。

Guenji 源氏 (巻3 p.160・13) varambe 童 (巻3 p.223・124)

Xunquan・Xū/quan 俊寛 (巻1 p.92・116,3-4)

拗音

拗音についても、今までみてきたような短音節の表記法にもとづいてあらわされている。「ニャ・nha」、「ニョ・nho」の綴りは特殊であるが、これも、ポルトガル語の表記法にしたがった形である。

Nhoizan 如意山 (巻2 p.114・19)

この当時あらわされた、ポルトガル語式綴りのローマ字は、ポルトガル語の発音と表記法にもとづき、当時話されていた日本語の「音（発音）」を忠実にあらわすことを第一に考えてられていた。ポルトガル人宣教師が、布教先の国である日本の言語を、まるで日本人のように話す（また、日本人の話している日本語をきちんと聞く）ためには、その当時一般的に話されていた日本語にとにかく近づかなければならなかったのである。そのために、この時代の特徴である「四つ仮名」や「長音の開合」(今回は触れていない)⁽²⁾の区別までもを詳細にあらわすために、あらゆる努力と工夫がされているのである。

しかし、これは、あくまで“ポルトガル語の事情（発音の実際・表記法）にもとづいた、ポルトガル人宣教師が日本語を理解、学習（習得）するのに都合がいいように”つくられているものである。この室町時代当時の音韻を体系立ててみる場合、どのようなものになるであろうか。

3. 音韻体系

先の2. では、ポルトガル人宣教師が、室町時代当時の日本語の発音を忠実に

あらわしたポルトガル語式ローマ字表記をみてきた。ここでは、室町時代当時の音韻体系をあらわしてみたい。表にしてあらわすと、以下のとおりになる。

音韻体系表 (/ /は省略)

a	i	u	e	o	ja	ju	jo	wa
ka	ki	ku	ke	ko	kja		kjo	
ga	gi	gu	ge	go	gja		gjo	
sa	si	su	se	so	sja	sju	sjo	
za	zi	zu	ze	zo	zja	zju	zjo	
ta	ti	tu	te	to	tja		tjo	
da	di	du	de	do	dja		djo	
na	ni	nu	ne	no	nja		njo	
fa	fi	fu	fe	fo	fja		fjo	
ba	bi	bu	be	bo	bja			
pa	pi	pu	pe	po	pja			
ma	mi	mu	me	mo	mja			
ra	ri	ru	re	ro	rja		rjo	
N								

空欄にしている箇所は、実際に「Feique」内に表記例がみられない箇所である。音韻体系を考えるにあたり、空欄部について、「こうなるであろう」と想定しすべてをうめることはできるであろうが、ここでは実際に使用された用例を対象とするので、表記例がないと考えられるところはそのまま空欄とした。

以下、主な特徴をあげていく。

カ行の「クッ・qua」ガ行の「グッ・gua」は、それぞれ「カ・ca」「ガ・ga」とまとめ/ka/、/ga/とした。

現在では、ダ行の「ヂ」「ヅ」は、ザ行の「ジ」「ズ」とまとめられ、/di/、/du/は記されないが、この時代にはまだ「四つ仮名」の区別が残っており、語による使い分けが存在していたとみられる。そのため、/di/、/du/はいきていたと考えられるので、表中でもそれをあらわした。

ハ行音は、室町時代当時は、現在のようなh [h]音ではなく、おそらくf [Φ]音であったと思われ、表記においてもfを使用している。そのようなことから、表中にも/f/であらわした。

撥音については、ローマ字表記において三種（「n、m、~」）であったものを、ここでは/N/でまとめた。しかし、「m」については、「n」や「~」とはその音や使用法などで違いがみられる。これに関しては、その成り立ちや変遷からもう一度みていく必要があるのではないだろうか。もしも「m」が独自の音や使用法を持っているならば、撥音における三種のローマ字表記のものを、すべてひとまとめにして/N/であらわすことができなくなるだろう。

4. まとめ

ポルトガル語式ローマ字綴りににおける音声的な面を重視してみていくときには、ローマ字表記の同音異字・異音同字の現象、また普段見慣れない表記法や符号に注目をしていくことになる。一方、音韻面から、室町時代当時の言語現象を体系的にみていくためには、当然のことながら、上記のような音韻体系での考え方が必要である。“同一言語集団内で、それぞれに共通すると認識できる音声的な特性”である音韻面から体系立て、またそこからの考察を試みることで、音声面の細かい部分にこだわってみてきたときにはみられなかったことがみえてくるはずである。

ローマ字表記は、あくまでも、ポルトガル人宣教師が、日本語を研究するにあたって、自国のポルトガル語の実際にそって、自分たちが解釈をしやすいように考えたものである。室町時代当時の日本語の音（発音）を忠実に再現している、という点では評価される貴重なものであり、まだまだ興味深い研究課題を多く持つ魅力的なものである。しかし、当時の活用する語の活用のかたちをみていくときには、これではうまくみられない。そこで、室町時代の言語現象をみていく際の基本としても、この音韻面からみた体系立ては大事なのである。

今回は、主に「Feige」の実用例から、対象範囲を「短音節」のみにしぼってみてきたが、今のままでは、まだまだ不十分な点が多い。今回対象範囲としなかった開音・合音の区別のある長音や促音・入声⁽³⁾の部分について、それがもつ歴史や成り立ちなどの観点からも今後も研究をつづけ、さまざまな改善をし、室町時代当時の日本語全体の音韻体系を完成させることを課題としていきたい。

注

(1) 四つ仮名

「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の仮名は、現在では一般的には発音の上で区別されることはない。しかし、室町時代の中頃まではそれぞれ異なった音韻を表す文字として混同することがなく、語による使い分けがあった。室町時代末期頃から、発音が似通ったものになり、徐々に両者の混乱が広まり、江戸時代にはほぼその識別が困難になっていた。「四つ仮名」とはこの「じ」「ぢ」「ず」「づ」という四つの仮名とその音韻の違いのことをいう。

キリシタン資料のローマ字表記においても、一般に「ジ・jiーヂ・gi」、「ズ・zuーヅ・zzu」とそれぞれを表し分けているところから、この当時はまだ「四つ仮名」の規則が残っており、語による使い分けがされていたと考えられる。

(2) 長音の開合

室町時代当時の日本語の長音は、ウ段とオ段のみにあったとされている。

ア段、イ段、エ段は、二重母音としてあらわされていた。イ段はイイとして「ij」または「iy」、エ段はエイとして「ei」というようにならわされていた。ア段のものについては、「aa」というものだけではなく、「à、Hà、yà」などのように符号をつけて

あらわされているものもある。

この時代の長音には、「開音（開口音）」と「合音（合口音）」という二種類があり、語による使い分けが残っていたといわれている。この開合の区別は、長音符号をつくりだしてあらわし分けている。この符号がつけられるのは、ウ段とオ段である。拡がる・開くなどの意の‘ひろがる’「ō」と、引く・延ばすなどの意の‘ひく’「ū」、狭まる・縮まるなどの意の‘すぼる’または‘すぼる’「ô」というように示される（開合は、複合アクセントに属するとの見解に立って、アクセント符号を組み合わせ、**「ō、ô」**と写し、ウ段長音には一般的には**「ū」**と書いたが、**「û、û」**と写した例もある）。

なお、ア段に附されている符号は、長音符号にあたるものかどうかは、はっきりしていない。

(3) 入声

入声とは、漢字の四声の一つで、韻尾が p、t、k でおわるものをいう。あらわれるのも、字音語に限られ、字音の影響によって、まれに和語にもあらわれたのかとも思われる。その p、t、k の入声音のうち、t 入声音は、室町時代末期の口頭音でも生き続けていたようである。しかし、規範的には入声形を正しいとしながらも、一般的な話しことばにおいては、開音節化の傾向が次第に進んでいたらしい。実際のキリシタン文献資料のローマ字表記においても、同じ語でありながら、入声「t」を用いているものと、開音節「tçu」を用いているものの二とおりのパターンがあらわれている（混在している）という現象もみられる。

〈参考文献〉

『邦訳日葡辞書』土井忠生、森田武、長南実・岩波書店・1980.5.29

『日本大文典』原著者：J. ロドリゲス、訳注者：土井忠生・三省堂・1995.11.10

（復刊第2刷）

『キリシタン教義の研究』橋本進吉・岩波書店・1961.3.24

『天草版伊曾保物語の研究』井上章・風間書房・1968.6.15

『天草版平家物語 対照本文及総索引』本文篇・索引篇 江口正弘・明治書院・1986.11.20

『天草版平家物語 大英図書館本影印』解題：福島邦道・勉誠社・1994.3.25（再版）

『FEIQE MONOGATARI 翻刻版』溝口博幸・大東文化大学市井外喜子研究室

・2000.11.10

『にっぽんご5 発音とローマ字』教育科学研究会・秋田国語部会・むぎ書房・1966.5.30

『室町時代の国語』柳田征司・東京堂出版・1985.9.25

『国語音韻論』馬淵和夫・笠間書院・1977.9.30（5版）

『概説日本語』北原保雄・朝倉書店・1995.3.25

『八丈方言動詞の基礎研究』金田章宏・笠間書院・2001.9.9

『すべての日本語学習者のための日本語学の常識』鈴木康之他・海山文化研究所

・2002.3.24

「キリシタン文献にみるローマ字」根岸亜紀・「研究会報告」第22号

・日本語文法研究会・2001.3.25

* 本論は、2002年3月1日（金）日本のローマ字社・ローマ字のおはなし会（於 大東文化大学 鈴木康之研究室）、および、2002年5月25日（土）大東文化大学日本文

学会春季大会（於 大東文化大学 1号館306教室）においての発表をもとにしてまとめたものである。指導教授である鈴木康之先生・市井外喜子先生をはじめ、ご指導・ご教示賜りました方々に、心から感謝の意を表します。